

芸術文化学部 研究プロジェクト 平成20年度公募プロジェクト報告

芸術文化学部の組織は、学生が所属し教育が行われる教育部と教員が所属し研究・社会貢献活動を推進する研究部で構成されている。研究部では、定期的に会議を開催し各種研究情報の提供や科研費の獲得推進に係わる支援などを行っている。また、地域から寄せられた課題を調整して学部として対応すべきものは研究プロジェクトとして組織的に対応して地域との連携事業を推進している。

平成20年度は、複数の教員が共同して実施する萌芽的研究および国際的研究活動を推進するため公募型研究プロジェクトを実施した。募集に対して1件の共同プロジェクト、5件の国際交流プロジェクトの応募があり、検討・調整の結果6件すべてを採択した。実施内容は各報告の通りであるが、研究を通して得られた成果は年度末の研究部会議にて報告会を開催し情報共有を図った。

研究部プロジェクト推進会議議長
武山良三

英国における環境芸術の調査

自然環境の美学の構築のために

● 伊東多佳子

実施概要

2008年9月15日～9月30日に16日間にわたる英国の環境芸術の調査を行った。実施場所は、英国北西部に点在するシープフォールズ・プロジェクト（スコットランド、ダンフリーズシャー、イングランド、カンブリア州、同ヨークシャー州、全46点）およびヨークシャー・スカルプチャー・パーク（ヨークシャー州）およびグライズデイルの森（カンブリア州）であり、公共機関から離れた場所に位置する調査箇所を効率よく経済的に回るために、レンタカーを利用し、作品の映像資料はデジタルカメラにより記録した。

成果と展望

本研究は、変貌する現代の自然環境の経験を美学的に分析し、記述し、従来の西洋哲学が示してきた「自然」対「人間」という二元論を超えたところに、あらたな人間と自然の関係を築くための指針となる「環境美学」を提示することを目指している。具体的には「歴史性を持つ自然」という現代の保全生態学の自然観を基礎に、環境芸術作品の現地野外調査による作品の詳細な分析により、自然環境との関わりに重点を置いた英国環境芸術の個別の実証研究を行った。



アンディ・ゴールドスワージー (Andy Goldsworthy 1956-) 《メルマービーの水溜まりの石のある羊洗いの囲い》1996年 (Melmerby Dubstone Washfold, 1996)

中華人民共和国 精華大学（北京）他三大学研究者との交流及び調査

● 後藤敏伸・安達博文

今回の調査による実証研究に基づき、最新の環境芸術の作品を現代の自然環境を強く映し出す環境芸術の現状を歴史的な背景とともに明らかにしながら、守るべき自然の行方を見据えつつ、自然に対する人間の今後の関係を築くための指針を示す環境美学を提示する——この目標に向かう成果の一部は、本誌掲載の「石を包む石——アンディ・ゴールズワージーの《シープフォールズ（羊囲い）》をめぐる考察——」において発表される。

北京清華大学美術学院は周知のごとく中国の美術系大学としては最高学府の評価を持ち、昨今は中国の文化政策の最先端を担っている。



北京精華大学美術学院正面外観

富山大学の基本方針、及び『国立大学の目指すべき方向—自主行動の指針—』（国立大学協会2008年3月）に於いても国際交流の拠点化を目指すべく戦略事項として掲げられている。

本学部に於いても、その方向性に沿っての具体的な戦略が必要であり、優秀な留学生の獲得、教員の交流、学部学生への留学意義の刺激が必要と思われる。

これまでの様な交流協定を結ぶ為の親善訪問では、設立間もない当学部との交流協定締結の可能性は極めて低いものと思われる。そこで、学部の教育資産や授業成果に留まらず、教員の日常的研究成果や業績等もプレゼンしたものである。

現在、清華大学美術学院には金 剣平、藩 毅群、躡 耀寧副教授等数人の知己もあり、協力を得ることができた。通訳として、以前教育学部の後藤研究室へ留学経験もあり清華大学美術学院への知己も多い北京工商大学印刷学院の胡 文光副教授や王 鶯氏が最適であると考え、協力を得た。

入試競争率60倍ともそれ以上とも言われている清華大学の学生の質の高さや、一専攻あたりの教員数の多さからも、その教育資産は評価以上のものがあり、学生、教員、あるいは作品を通しての交流は刺激的であり、当学部受験生への大きなアピールにもなる。中国の、北京オリンピックを境とした文化政策の改革的方向性は、ヨーロッパ諸国をはじめとして注目されているところであり、交流協定を締結するには正に今であると考えた。尚、日本国内では、東京芸大、多摩美大等が協定を結んでいる。

以下の日程に沿い交流調査を行った。

3月15日 移動（中国）

3月16日 北京清華大学表敬訪問

芸術学部の研究者との交流を始めるための調査
国際金属工芸展開幕式に参加(作品出品依頼)
学内の教室見学
研究者との意見交換
日本の現代美術についての講演—後藤敏伸



左：北京精華大学美術学院内部 右：「2009 国際金属工芸展」会場風景

3月17日 北京中央美術学院表敬訪問

王 漸蓬教授北京オリンピック総合デザイナー
芸術学部の研究者との交流を始めるための調査
学内の教室見学
研究者との意見交換



左：北京中央美術学院構内 右：同院監修のオリンピック関連デザイン展示

3月18日 上海第二工業大学(応用芸術設計学院)表敬訪問 張 展学院長

現代日本美術についての講演—後藤敏伸
自作の絵画制作法についてのプレゼン
—安達博文



上海第二工業大学応用美術設計学院校舎

同済大学表敬訪問

現代日本美術についての講義—後藤敏伸
教員と大学院生との交流



左：同済大学の院生に自身の制作について講義中 右：林教授及び院生との交流

3月19日 移動(帰国)

北京精華大学は、本科生14,000名が芸術学部、理学部、工学部、文学部、法学部、経済学部、経営管理学部などに学ぶ中国で最も評価の高い大学であり、国家重点大学のひとつである。大学ランキングでは清華大学が中国のトップ大学となっており、評価が定着している。芸術学部は1学年240名の人員構成となっていて、絵画、彫刻、版画、工芸、デザイン等の分野で学ぶ。施設、備品に関しては日本の有数の美術系大学が持つレベルと同等もしくはそれ以上に充実している。高受験倍率の中から入学した学生の作品についても優れたものも少なくなく、好感を持った。また教員については、国際的な視野を持ちつつ、中国の伝統文化に根ざした現代の美術へと取り組む研究制作及び教育観を持ち始めているとの強い印象を受けた。教員及び学生等が持つ日本への関心度は高く、部局間国際交流への手応えを感じた。日本の芸術文化の原点は中国にある。古く、中国の芸術文化を吸収しつつ独自のものとして築き上げ、それを世界に発信している日本。富山大学は東アジア文化圏における研究等を標榜しており、教員の教育・研究、学生の研究や修学にあたってのメリットは大きく、部局間国際交流は大いに意義がある。また、少子化の影響による学生確保として、留学生の受け入れも視野に入れる必要がある。これらから本学部が部局間国際交流協定を積極的に締結するに値するものと判断した。

タイ王宮壁画の保存修復のためのデータ構築

● 辻合 秀一

平成20年度に実施した「タイ王宮壁画の保存修復のためのデータ構築」プロジェクトは、平成19年から平成20年に科学研究助成金「タイ王宮壁画の保存修復技法の研究―修復技法の指導を通して―」で調査したタイ王宮壁画の保存修復のために収集した情報を整理し、視覚的に把握できる研究データを構築することである。多くの記録写真を整理すると共に大量のデータをコンピュータ上で3次元データとして視覚化した。その結果は、下記の文献に表した。研究室では、タイ王宮壁画の写真等を閲覧できるように整備中である。

参考文献

- 1) 辻合秀一：タイ王宮ワット・プラケオ回廊の画像データベース化について、人文科学とコンピュータシンポジウム論文集、情報処理学会シンポジウムシリーズVol.2008、No.15、pp.141-146、2008（於 筑波大学）
- 2) 辻合秀一：壁画構造を利用した壁画の抽出―タイ王宮ワット・プラケオ回廊の壁画への画像処理―、電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーショングループシンポジウム、電子情報通信学会技術研究報告、Vol.108、No.490、pp.9-14、2009（於 島根大学）
- 3) Hidekazu TSUJIAI: "Virtual Wall Painting of Thai Royal Palace Wat Phra Kaeo Corridors", NICOGRAPH INTERNATIONAL CONFERENCE, pp.101-104, 2009（於 金沢歌劇座）



フランスの国立建築大学の建築家・研究者との交流を始めるための調査

● 松政貞治

建築・都市計画の分野での学部間・大学間交流の可能性を探ることと、それらの大学に所属する建築家・研究者との研究交流を深めることを目的としたもの。松政のパリ留学（1982-87年）以来の交流を発展させようとした。ブリュターニュ建築大学とリヨン建築大学を中心に、レンヌ、ナント、パリ、リヨンの各市の関係者を訪問しながら、研究交流の素材・事例の調査を行った。ブリュターニュ建築大学学長クリスチャン・ランドー氏、レンヌ圏都市計画・再開発局長ジャン・ミシェル・マルシャン氏、レンヌ市の建築家ティエリー・ローティ氏、ナント建築大学・パリ・ラ・ヴィレット建築大学元教授建築家ドウ・リュウ氏、パリ・ラ・ヴィレット建築大学フィリップ・ブドン名誉教授・フランソワーズ・ブドン名誉教授夫妻、パリ空港公団カレド氏、リヨン建築大学教授J.Y.ケイ氏、リヨンの建築家ミシェル・フェラン氏フィリップ・シガル氏などと協議・交流した。調査成果は各種資料の他、松政が撮影した12,000枚の写真、20時間分のビデオなどが含まれる。学部間・大学間交流の可能性としては、ブリュターニュ建築大学とリヨン建築大学について、先方の意見として研究交流、短期学生交換などを重ねれば遠からず可能であることが確認された。こちら側の意向に委ねられた形となっているが、現在のところ学部運営の課題としてはその動きは始まっていない。

電動コミュータのデザイン開発

● 林 暁

◎実施内容

本研究の内容は、デザインという立場から次世代の新しいコミュータの形を考え、提案するものである。具体的には非常に軽い重量の電動コミュータを、コンセプト・構造・材料・工作法も含めデザイン・提案することである。

以下が、本年度の実施内容である。

1、小型自動車やコミュータに関する資料収集

東京ビッグサイトで開催された国際カーエレクトロニクス技術展に林、小川、両名で出張し最新のカーエレクトロニクスについて取材。同展で私どもと富山のタケオカ自動車工芸が共同開発中の電気自動車、T10の試作車の展示を行っていたので、来場者の反応を見る機会にもなった。

2、3次元CADの調査及び購入

ソリッド系3次元CADのソリッドワークスについて調査を行い、本研究及び本学部の教育に関しても有効であるかどうかを検討した。現状で使っているライノセラスとの相性もある程度良いことから、アカデミックヴァージョン10ライセンスセットを購入した。

3、トヨタ車体製 電動コミュータ「コムス」(中古完動品) 2台の購入

小型電動コミュータのサンプルおよび試作車の部品取り用にトヨタ車体製「コムス」2台を本プロジェクトの予算の一部を使って購入した。

◎成果と展望

研究としては端緒についたところで、予定していたことの一部しか本年度中に実行できなかった。地球温暖化や環境問題などへの対応として、また二次蓄電池やモーターの開発が進み電気自動車の開発に弾みが付いてきているので、これからますます多様なデザインのコミュータが生まれてくるであろう。これまでのタ

ケオカ自動車工芸との関係も継続しつつ、学生も巻き込みながら試作車の段階まで研究が進み、成果の発表が出来ればと考えている。



図 1



図 2



図 3

図 1、図 2 は第 1 回国際カーエレクトロニクス技術展に出品されたタケオカの試作車

図 3 は 2 台購入したトヨタ車体製コミュータ「コムス」

漢字運用と華文教学国際学術シンポジウムへの参加

● 山田 眞一

平成20年11月1日～2日にかけて、台北にある国父記念館において開催された、「漢字運用と国(華)語文教学国際学術研討会」に参加し、中国語における漢字問題について、参加者と討論を行った。参加国・地域は、台湾、中国、香港、日本、韓国、アメリカ、ドイツ、フランス、フィリピン、マレーシアであり、参加人数は178名であった。

シンポジウムでの討論を通じて明らかになったことは、中国語における漢字表記は、言語的な問題と政治的な問題が複雑に絡んでおり、台湾人のアイデンティティーと深く関わる問題であるということである。

この点は、基調報告における、台湾で使用されている漢字を「正体字」と呼ぶべきであるという主張に典型的にあらわれている。中国大陸で使用されている漢字の一部は、字形を簡略化した「簡体字」と呼ばれ、台湾で使われている漢字を中国では「繁体字」と称しているが、台湾で使用している漢字が本来の字形である「正体字」であり、「繁体字」という言い方は、「正しくない」という主張である。討論全体を通じて共有された認識は、漢字は単なる意匠ではなく、漢字を使用する社会の歴史と政治に深く根関わるものであるということである。

「ことば」は文化そのものであり、個人や民族のアイデンティティー形成の重要な一部であり、ことばを表記する「文字」もその点は同様である。このことは隣国のみに限られることなく、日本においても、標準語普及のためにかつて、沖縄の小学校では、「方言カード」なるものが使われ、授業中に「沖縄方言」を口にすると、「方言カード」を首からぶら下げさせられたという痛ましい事実がある。「ことば」に対する深い理解と洞察に基づいた、研ぎ澄まされた感性を養うには、こうした「ことば」の持つ文化的・社会的・政治的意味と機能に対する認識が根底にあってはじめて可能になるのである。

「モノ」に名を付けるという場合にも、ことばの目新しさのみを追求した「ネーミング」に腐心するのでは、

ことばを単に消費の道具として使っているにすぎない。

「ことば」を単にコミュニケーションの道具にとらえる考え方が、いかに浅薄な考えであるかを再認識したシンポジウムであった。

